
古代アメリカ学会会報

第33号



ニカラグア、オメテペ島、エル・ポルベニール遺跡の岩刻画群 ©市川彰

目次

◆会員からの寄稿	1	◆事務局からのお知らせ	16
◆フォーラム・シンポジウム情報	6	◆原稿募集	17
◆第9期役員紹介	8	◆会員の叙勲	18
◆第17回研究大会報告	8	◆編集後記	18

2013年1月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

メキシコ展覧会記

—オルメカ展そしてサムライ展によせて—

村野正景（京都府京都文化博物館）

はじめに

改めて紹介する必要はないとは思いますが、メキシコシティの西部、チャプルテペック城を囲む森林公園内に、メキシコ国立人類学博物館（MNA）があります。観光客のみならず、古代メソアメリカを研究する者なら、この巨大な博物館を一度は訪れていることでしょう。ここで、今年2012年7月26日から10月21日に、日本のサムライ文化を紹介する特別展覧会「Samurai: Tesoros de Japón（侍：日本の至宝展）」が開催されたことをご存知でしょうか。サムライ展は、メキシコ人類学歴史学研究所（INAH）に京都文化博物館と名古屋市博物館が協力して、実施されました。この展覧会をおこなう過程で、メキシコの展覧会事情、ひいては文化行政をとりまく環境や様子的一端が伝わってきたり、また通常の展覧会とは若干異なる工夫もあり、今後展覧会を予定していらっしゃる研究者の参考にしていただくこともあろうかと考えたりしたため、本展覧会担当者の一人として、雑文かつ非常に断片的ながら、展覧会の報告をいたします。



サムライ展広報（MNAの入口すぐ）

展覧会の開催経緯

そもそもメキシコでサムライ展がなぜ開催されたのでしょうか。実は、この展覧会は、2010年7月から2011年9月まで日本の五ヶ所の会場（京都、名古屋、東京、北九州、鹿児島）で開催された「古代メ

キシコ・オルメカ文明展」の返礼展でした。オルメカ展は、京都文化博物館（担当：南博史（現・京都外国語大学教授））によって企画されました。当館とメキシコ・中米との20年近いご縁を活かしつつ、様々な関係者のご協力のもと、INAHとの交渉と関係作りを経て実現できた展覧会です。オルメカ展は、2009年から2010年にかけて、日本とメキシコの交流400周年を祝う行事の一環として両国政府をはじめ公的にも後押しされました。

このオルメカ文化の資料に対し、メキシコ側から要望されたのが日本のサムライ文化の資料でした。サムライがテーマに選ばれたのは、日本を代表する文化ということのほか、1982年にメキシコで開催された「日本：侍の時代展」で大きな成功体験をもっていたことや、日本の漫画やアニメによる「サムライ」がメキシコの人々に人気が高いことが理由のようです。この要望を日本側はうけいれましたが、展覧会開催にあたって、最後の理由については不安もありました。

気になったのは、アニメなどでのイメージがずいぶん一般に広まっている中、メキシコ側の展覧会担当者にサムライ文化の専門家はいなかったこともあって、日本側がつくった展示企画とメキシコ側の期待とのギャップが大きくなるか、関心が失われたり、来場者が少なくなったりしないかという点です。そういえば日本でも、マヤやアステカなど先スペイン時代の文化の伝え方が課題になっていますが、同様にメキシコでも日本文化の伝え方という課題は存在することでしょう。この課題は検討する余裕が残念ながらありませんでしたが、こうした危惧もはらみつつ、またここに書ききれない多数の壁を乗り越え、2012年、今度はメキシコで両国の友好を記念し、日本の特別展覧会が開催されたのです。

日本の特別展への期待と注目

蓋を開けてみると、サムライ文化がどのように理解、解釈されたのかは詳らかでないとしても、メキシコにおけるサムライ文化への興味や注目の高さは、INAHだけではなく、確かに各所でみうけられました。資料を展示する際に、資料の梱包されたクレートが開けられるたび、博物館関係者が嬉々として資料を見に集まってくる様子、また展示品の金鯱や鎧の前で展示後早速はじまる記念撮影の様子には、私もサ

ムライ展担当の一人として安堵と喜びを覚えました。一般の人々の関心もそれなりに高かったとみえ、2ヶ月以上にわたる展覧会の開催期間で約18万人の入場者がありました。入場料が無料になる日曜日には、最高で9000人を超える入場者があったとのこと。これらの数値は興味や関心の高さをある程度証明したようにも思いますが、そもそもこの博物館には、毎年どのくらいの来館者がいるのでしょうか。

博物館の関係者によると、2011年には約177万人が訪れ、そのうちメキシコ人が約157万人、外国人が約20万人とのこと。外国人の数の多さは、さすが観光を国の重要な資源とするメキシコです。しかしそれを大きく上回るメキシコ人の来館者の数、実に約9割がメキシコ人であることも、文化遺産教育の盛んなメキシコの特徴をあわらしているように思います。ただし、このような実績は毎年のことではないそうです。

実は、2010年の来館者数は2011年よりもかなり少なく、約100万人だったそうです。その年、海外の文化遺産を紹介する特別展覧会はおこなわれず、国内の文化遺産による展覧会のみでした。毎年の統計や社会学的調査結果などの裏づけがあるのか私にはわかりませんが、これが一つの要因となって、2011年に中国やインドの展覧会を開催することになったようです。その意味で、今年2012年の日本のサムライ展は、一般の人々だけではなく、INAHなど博物館関係者からも期待をよせられていた展覧会と言えるでしょう。

蛇足ですが、もちろん国内の文化遺産による展示にも、とりわけ常設展へ非常に多くの来館者があることは見逃してはなりません。何を当然のことを、と思われるかもしれませんが、私の所属する博物館（そしておそらく日本の多くの地方博物館）で、特別展をおこなっていない時期の入館者数が、特別展期間中と比べて大きく減る状況にあること、それが一つの原因となり、特別展や企画展を目まぐるしいほど次々に行い、常設展への比重が相対的に低くなっている現状を思えば、ある意味うらやましくあり、また常設展を含めた展示のあり方を考えさせられました。同時に、メキシコの地方博物館はどのような状況なのか、興味を覚えました。



MNA 外観と入場者の行列

期待と注目の“利用”

上記のような期待と注目を利用し、展覧会をさらに意義のあるものにしようという努力がありました。日本側では、とりわけ在メキシコ大使館や日墨協会、また姉妹都市提携35周年をむかえた名古屋市関係者（サムライ展の資料は、名古屋市博物館の協力により、同館の所蔵品から構成されました。）は、この展覧会会期中に、多岐に渡る催しや事業をおこなっています。展覧会は単なる博物館の事業にとどまらず、他の領域への波及効果を生み出したのです。

しかし一方で、別の形の利用もされる羽目にもなりました。我々が遭遇したのは、いわゆるデモです。多くの交渉を経て、また日本とは異なる環境での展示作業を終え、ようやく迎えた開会式。その式の会場を取り囲んでいたのは、展覧会の招待客だけではなく、抗議行動の参加者たちでした。抗議行動の主体は、INAHの職員、とりわけ考古学遺跡を中心とする文化遺産の保護や活用にメキシコ各地で実際に携わっている人々で、かれらによると、INAH上層部のマネジメントの不足により、数々の文化遺産が破壊されたり、破壊の危機に瀕していたりする現状、そしてその状況改善を主に訴えることが目的でした。開会式にはINAHの長官をはじめとする高官たち、それに駐メキシコ日本国大使がご出席される予定でしたので、抗議行動は直接かれらに物申す機会でした。サムライ展の内容や展覧会そのものへの批判ではないことは救いになりましたが、この行為により、開会式はほぼ中止状態に陥り、当時はある種の憤りを覚えました。しかし、今思えば、政権末期のメキシコの文化行政の状態を端的に示すできごとですし、また抗議の内容と意図を世間に広める絶好の機会として、つまりサムライ展がそれほど注目を浴びる場だと認識されていたことをよく示す証拠でもあり、

研究者として担当者として有意義な経験と言うべきかもしれません。



デモによる特別展チケット売り場の封鎖

展覧会という社会還元の仕事

さて、まとめにかえて、この展覧会の工夫についてふれておきたいと思います。サムライ展の実施前、オルメカ展の開催に際し、とりわけ資料の借用について工夫がありました。通常、この種の展覧会は、一方からもう一方への資料貸与にすぎません。その場合、資料の多額な使用料などが発生することが普通です。しかしこの展覧会では、双方向の資料貸与が約束されました。メキシコ側にとっても初の試みとのこと。この約束にしたがって INAH が借用を希望した資料のテーマ、つまりオルメカ文化の資料の対価、それが日本のサムライ文化でした。

ここでふれておきたいのは、なにも使用料を無料にしたという交渉術ではなく、相互貸与という形です。もともと、オルメカ展企画者は、サムライ展ではなく縄文文化展を提案していました。その意図は、資料の相互貸与を念頭に展覧会をデザインする、つまり両国の資料が扱えることを機に、両国で共通テーマとなる展覧会を企画し、それぞれの国でそのテーマを社会に問うという国際的展覧会の実現でした。ただ先述のように、今回、縄文展は実現しませんでした。

しかし少なくとも、従来よくあるような、研究者の古代アメリカの研究成果が日本で公開される、というだけではなく、研究者の研究フィールドに、今度は研究者自身の文化的基盤の一端を紹介するという形で、海外で研究するという行為が波及し、現地社会に還元されていくという形は非常に意義がある

のではないのでしょうか。自国の外で研究するのは、人それぞれの思いはあるでしょうが、一つの目標として、自他の相互理解の促進があるように私は思います。今回のような展覧会の仕方は、そうした目標に一歩近づくようなものだったのではないのでしょうか。

謝辞

10年以上前、学生として MNA を訪れた時、まさか自分がそこでおこなう展覧会の担当という榮譽を担うとは思いませんでした。紙幅の都合からお名前をあげることはできませんが、このような機会をくださった関係者の方々に衷心より感謝いたします。

アプの話

佐藤吉文（国立民族学博物館外来研究員）

アンデスでは、先スペイン期以来、山や湖や老木、岩などに霊的なちからをみとめ、これを信仰の対象とするワカ信仰がある。自然物にかぎらず、遺跡という人工物がワカとなることもままある。だから発掘の際には、パゴとよばれる儀礼がつきものだ（写真1）。

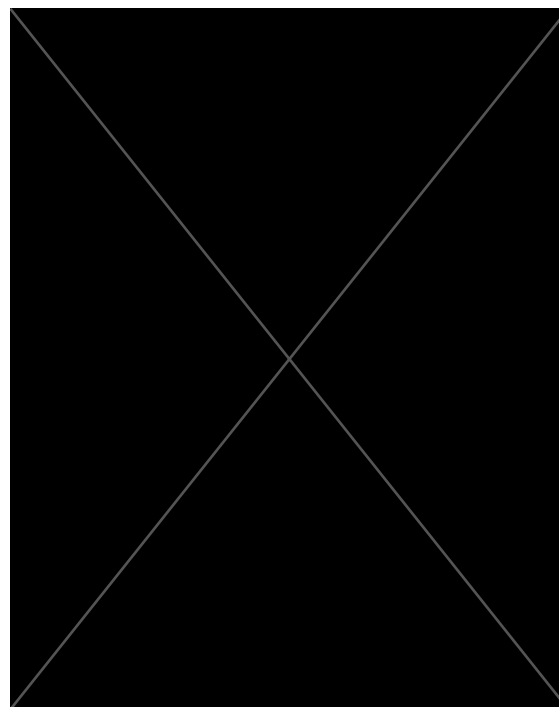


写真1 パレルモ遺跡発掘調査前のパゴの風景

実は、そもそもわたしが調査した遺跡もそうした

霊的な場に他ならない。ここには女性のエンカントが住んでいて、夜この場所を通りかかる男性を誘惑する。誘惑を振りきれなかった男性は病などにかかる。私が調査を始めた2006年当初もそうした信仰は若い世代までしっかりと受け継がれていた。発掘二日目、雇った作業員の一人が来なくなり、以降、給与の受け取りにも姿を現していない。

1. セロ・プカラ山とパレルモ遺跡

一方、ワカ信仰と深くかかわるかたちで、アプと呼ばれる山の神に対する信仰がある。私の調査地であるプーノ県チュクイト郡も例外ではない。郡庁所在地フリの南にそびえるセロ・プカラ山もそうしたアプの一つである。わたしが調査を行っているパレルモ遺跡はこのやまの西裾にある。

考古学的にみると、セロ・プカラ山はアルティプラノ期（後1100-1470年）の防砦遺跡で、山腹には頂上部へのアクセスを妨げる石壁が幾重も巡っている。パレルモ遺跡から見上げると美しい三角形をしている（写真2）。



写真2 セロ・プカラ山

この山をアプたらしめている要素のひとつは、乾季の真只中でも枯れることがないといわれる湧水だろう。河川や湖の水に微量ながら塩分が含まれるこの地方にあって、真水の存在は貴重である。だからこの山は、周囲で農耕・牧畜を営む住民たちにとっては恵みの象徴なのだ。

セロ・プカラ山と水を結びつける世界観は先スペイン期にさかのぼるのかもしれない。たとえば、ふもとにあるパレルモ遺跡では、半地下式広場を造るときに川砂を床の下に敷き詰めている。調査では広

場に屋根がかかっていたような痕跡は見当たらないから、ここは雨ざらしの空間だっただろう。ということは、雨季になれば周囲より低い広場の中には水がたまりやすい。ペルー北部地域の形成期神殿では、漆喰で床を覆った広場には排水機能を兼ね備えた暗渠が設けられたりもするが、パレルモ遺跡の半地下式広場には今のところそのような設備は認められていない。パレルモの人たちは、暗渠の代わりに吸水性の高い砂を敷くことでこの問題に対処しようとしたのかもしれない。

同時に、砂は水を象徴する物質でもあったのかもしれない。砂は水辺にたまるものだからである。実際、パレルモ遺跡面前のパンパを流れるサラド川の川辺では十分な量の砂を採取することが可能だ。セロ・プカラ山の裾野には山砂は見られないから、半地下式広場を設ける際の砂はこの河辺から持ちこまれた可能性が高い。

パレルモ遺跡を水と結びつける要素はもう一つある。パレルモ遺跡からセロ・プカラ山に登る斜面に湧水口があるのだ。その水量は比較的豊富で、いまではこの湧水を利用してティティカカ湖で養殖するマスの稚魚を育てているほどだ。このように、パレルモ遺跡という場は水とのむすびつきを強く連想させる。

2. アプと民話

セロ・プカラ山の湧水を巡ってはちょっとした説話がある。山のふもとのインカ・プカラというコムニダにすむ女性から聞いた話だ。

彼女によると、このアプ、実は女性なのだという。細谷によれば（1997: 40）、アプを含めた山の神には一般に男性性が付与される場合が多いというから、これは女性性を付与された数少ない報告例の一つだろう。そして、その東側にそびえるセロ・カラコヨ山と夫婦の間柄であったという（図1）。当然、セロ・カラコヨ山もアプだ。あるとき、この夫婦に横恋慕する輩が現れた。セロ・プカラ山から南にみえる縦皺のような絶壁のある山がそれだ（写真3）。ペルー国土地理院発行の地図には名前の記載はないが、Sinquin Camaña という地名が見えるあたりになるだろう。おそらくこれもアプである。この男アプはセロ・プカラ山を言葉巧みに連れ出して、ともに暮らし始めたという。夫アプであるセロ・カラコヨ山はこれに怒り、妻を連れ戻しにかかる。そうしてこの

騒動は終わりを迎える。

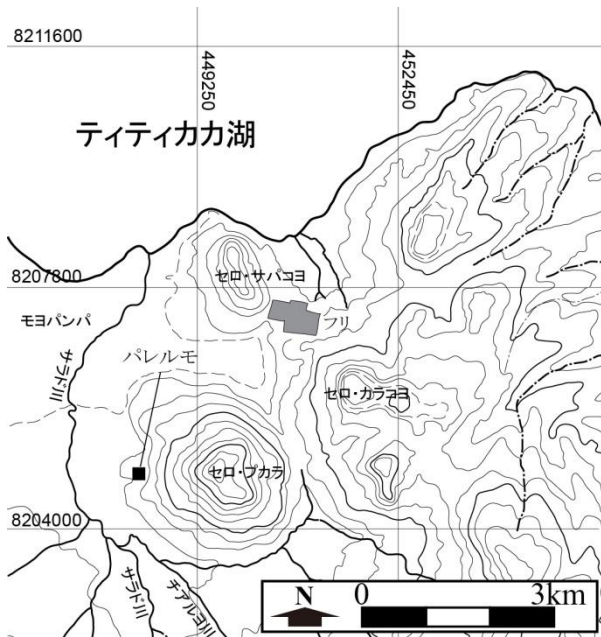


図1 フリ周辺地図

しかし話はそこで終わらない。このとき、セロ・プカラ山は相手の子を身ごもっていたからである。しかしその子が生まれることはなかった。連れ戻されるさなか、セロ・プカラ山が破水したからだ。彼女はその場にうずくまり動かなくなった。いま山があるところこそ、その場所だ。だから、今も枯れることなく山から湧き出す地下水は、彼女が破水したことによって流れ出る水なのだという。

一方、横恋慕した男アプは、連れ戻された女アプを想いながら涙した。だから、縦皺のような模様はその男アプが連れ戻された彼女を想って涙する姿なのだという。



写真3 横恋慕したアプ (写真中央)

3. ランドスケープとアイデンティティ

そのほかにもこのセロ・プカラ山は、地元住民のアイデンティティの表明において重要な役割をもっている。たとえば、セロ・プカラ山の地下にはトンネルがあり、クスコまで繋がっているという話がある。この類の説話はペルー全土に比較的多くみられるものだろう。表面的な分析ではあるが、そこには、トンネルを介して土着信仰の対象であるアプをクスコに結びつけることで、インカという表象を利用しながら地元住民がみずからの政治的な立場を主張する姿が目につく。先にあげた Inca Pucara という集落名もこのインカ主義に連なるものだろう。40年ほど前に発行されたペルー国土地理院の全国地図(第2版)ではこの集落付近の地名を Paque Paque と記しており、その名称がそれ以後につけられた新しいものであることがわかる。

ランドスケープという観点からみて興味深いもう一つの説話は、山の地下深くに黄金の動物像が埋まっているという話だ。どこにでもありそうな話だが、黄金の動物像は実はセロ・プカラ山だけに埋まっているものではない。先にあげたセロ・カラコヨ山、そしてセロ・プカラ山の北にそびえるセロ・サパコヨ山にも埋まっているというのである。興味深いのは、それら黄金の動物像がそれぞれ別の動物をかたどっているという点だ。サパコヨ山もまたアプならば、三柱のアプがそれぞれ異なる動物に結びつけられて表象されていることになる。

さらに面白いのは、この話が考古学データと奇妙な一致を見せることである。たとえば、ここにあげた三つの山は規模の違いこそあれ、いずれも山腹から山頂にかけてアルティプラノ期の防砦遺跡である。また、チュルパと呼ばれる地上墓や同時代遺跡の分布から推測される社会的境界図と重ね合わせると (Frye and de la Vega 2005)、それぞれの山は属するまとまりが異なってくる。いずれもアルティプラノ期のデータだが、黄金像の話との間に認められる親和性は注目し得る。

こうしてみると一つの可能性が浮かび上がってくる。アプや黄金の動物像が一種のトーテムとして地元住民のアイデンティティ形成に一定の役割をもっているという可能性である。もちろん、先スペイン期の歴史的状況を直接反映しているとは

限らない。現に、この地域のインカ期のセトルメント・パターンには社会的境界のようなものは見受けられないし (Stanish et al. 1997)、彼らが近所で発見された先スペイン期の埋葬や出土品について語るときには、それをインカ以前にいたというヘンティルと結びつける傾向があり、インカを境界にしてかれらの歴史認識は断絶しているように見える。これにはインカや初期植民地政府による移住政策や集住政策も関係していよう。

ただし、空間認識が時間認識を内包することはトンネル説話にみたとおりで、考古学データとの奇妙な親和性も魅力的だ。いずれにしてもアブがかれらにとっての生活をある一面において形づくっているのは間違いない。かれらにとってアブとは何かという問題に迫るには、だれによって、どのようにこのような話がかたられるのか、を丁寧考察することが必要になってくる。

参考文献

Frye, Kirk L and Edmundo de la Vega
2005 The Altiplano Period in the Titicaca Basin. In Advances in Titicaca Basin Archaeology-I edited by C. Stanish, A. B. Cohen and M. S. Aldenderfer, pp. 173-184. Cotsen Institute of Archaeology at UCLA, Los Angeles.

細谷広美

1997 『アンデスの宗教的世界：ペルーにおける山の神信仰の現在性』明石書店、東京。

Stanish, Charles, Edmundo de la Vega M., Lee H. Steadman, Cecilia Chávez Justo, Kirk L. Frye, Luperio Onofre Mamani, Matthew T. Seddon, and Percy Calisaya Chuquimia

1997 Archaeological Survey in the Juli-Desaguadero Area, Lake Titicaca Basin, Peru. Fieldiana Anthropology, New Series 29, Field Museum of Natural History, Chicago.

フォーラム・シンポジウム情報 (本学会協力事業)

公開フォーラム

「古代文明の生成過程—マヤとアンデスの比較」

【日時】2013年1月27日(日) 13:00~16:00

【場所】キャンパス・イノベーションセンター東京
1階 国際会議室
東京都港区芝浦3-3-6

〔 JR山手線・京浜東北線 田町駅から徒歩1分
都営地下鉄浅草線・三田線 三田駅から徒歩5分 〕

【定員】100名(先着順)

【参加費】無料 申し込み不要

【主催】国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表 関雄二)

【共催】科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」(代表：青山和夫)

【協力】古代アメリカ学会

【趣旨】

アメリカ大陸では、中米に位置するメキシコやグアテマラを中心にマヤ、アステカなどの古代文明が、南米のアンデス山脈添いにはインカに代表されるア

ンデス文明が成立しました。本フォーラムでは、中米のマヤと南米のアンデスをとりあげ、この地で長らく研究に携わってきた日本人研究者に最近の調査成果を報告してもらうとともに、両地域の古代文化の特性について、比較してみたいと思います。近年、いずれの研究分野でも、学問領域の細分化が進み、個別的なデータの蓄積は図られつつあるものの、普遍化や一般化を敬遠する傾向が見られます。本フォーラムはこうした現代の学問潮流に一石を投じ、比較の視座を確保しながら、古代文明の生成過程を改めて考察しようと考えています。

【プログラム】

13:00~13:05 あいさつ
13:05~13:35 「遠隔地交流と複雑社会の形成—アンデス中央高地の事例から—」
松本雄一(国立民族学博物館)
13:35~14:05 「アンデス文明における権力の発生—最新成果報告」
関 雄二(国立民族学博物館)
14:05~14:35 「石器研究からみるマヤ文明の盛衰」
青山和夫(茨城大学)

14:35～15:05 「セイバル遺跡の発掘成果とマヤ文明の起源」
猪俣 健 (アリゾナ大学)
15:05～15:15 休憩
15:15～16:00 ディスカッション

【問い合わせ先】

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園 10-1

国立民族学博物館

TEL :

FAX :

E-mail

国際シンポジウム

「中期ホライズンの多様性と共通性」

【日時】 2013年2月16日

【場所】 国立民族学博物館第6セミナー室

【定員】 20名 (先着順)

【言語】 スペイン語 (通訳なし)

【主催】 国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表 関雄二)

【協力】 古代アメリカ学会

【趣旨】

このシンポジウムの目的は、アンデス考古学において中期ホライズン(後550～1000年)と呼ばれる時代に関する知見を深めることにあります。一般的に、中期ホライズンという時代はアンデス地域(現在のペルー)に成立したワリ帝国を関連付けられてきました。しかし、「帝国」という概念が多く異なる意味を含んでしまうとしてその使用を避け、逆に地域の自律性やエージェンシーの重要性を強調し、帝国に代わるモデルの提示を試みる研究者もいます。

中期ホライズンにおいてどのような共通性や多様性が存在したのでしょうか?それをどのように説明するべきでしょうか?帝国モデルと地域的自律性モデルは一つの現象の異なる側面を説明するのでしょうか、それとも中期ホライズンをよりよく理解するためには両者を統合する必要があるのでしょうか?これらの問題意識の下、このシンポジウムでは各々の発表者が自身のデータを基に議論します。

【プログラム】

11:00～11:05 開会式

11:05～11:15 趣旨説明

渡部森哉 (南山大学)

11:15～12:00 “Variación material en la cultura Wari: Una perspectiva desde la capital Ayacuchana”

ウィリアム・H・イズベル

(ニューヨーク州立大学)

12:00～12:15 質疑応答

12:15～13:30 昼食

13:30～14:15 “Continuidad y cambio en Huarpa y Huari: Un análisis de los datos de las excavaciones realizadas en la comunidad de Trigopampa, Ayacucho – Perú”

土井正樹 (京都文教大学)

14:15～14:30 質疑応答

14:30～15:15 “Tumbas y residencias de elite Wari en la región sur del Perú”

ジュリーノ・サパタ

(クスコ、サン・アントニオ・アバド大学)

15:15～15:30 質疑応答

15:30～15:45 コーヒーブレイク

15:45～16:30 “Dominio provincial Wari en el Horizonte Medio: un caso de la sierra norte del Perú”

渡部森哉 (南山大学)

16:30～16:45 質疑応答

16:45～17:30 “Wari y Mochicas en el valle de Jequetepeque: causalidad, agencia e interacción”

ルイス・ハイメ・カスティージョ

(ペルー・カトリック大学)

17:30～17:45 質疑応答

17:45～18:30 総合討論

【問い合わせ先】

〒565-8511

大阪府吹田市千里万博公園 10-1

国立民族学博物館

TEL :

FAX :

E-mail

第9期役員紹介

第9期役員選挙（会長、代表幹事、監査委員）と加藤泰建会長の任命（運営委員）により、第9期役員が以下の通り決定しました。学会の運営につきまして、今期も会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

会 長 加藤 泰建（埼玉大学）
代表幹事 井口 欣也（埼玉大学）
監査委員 長谷川 悦夫（埼玉大学）
伊藤 伸幸（名古屋大学）

事務幹事 山本 睦（埼玉大学）

運営委員

会計 浅見 恵理（総合研究大学院大学博士課程）
編集 井上 幸孝（専修大学）
吉田 晃章（東海大学）
芝田 幸一郎（神戸市外国語大学）
広報 芝田 幸一郎
研究 鶴見 英成（東京大学）
会報 福原 弘識（国立民族学博物館）
中川 渚（総合研究大学院大学博士課程）

第17回研究大会報告

2012年12月1日（土）に国立民族学博物館で開催され、会員50名、一般参加者23名、計73名の参加があった。第17回研究大会の発表は以下のとおりである。



調査速報<前半>（9：20 - 12：10）

9：20 - 9：40

「ペルー中央高地アヤクーチョ谷、タンタ・オルホ遺跡出土の形成期の土器」
土井正樹（京都文教大学非常勤講師）

先行研究により、ペルー中央高地のアヤクーチョ谷には、中央アンデス地域の編年上、形成期に位置づけることができる遺跡が複数存在していることが確認されている。しかし、ペルー北部の海岸部および高地における形成期遺跡の調査数の多さと比較すると、アヤクーチョ谷の形成期遺跡に関する調査は

少なく、それらに関する資料も限られている。そのため、中央アンデス地域の形成期研究の進展にとって、アヤクーチョ谷の形成期遺跡に関する資料を増やすことが欠かせない。そこで本発表では、アヤクーチョ谷の形成期に関する新たな資料として、アヤクーチョ谷のタンタ・オルホ遺跡から出土した形成期の土器について報告する。

タンタ・オルホ遺跡は、ペルー中央高地南部に位置するアヤクーチョ谷の、トリゴパンパ村に位置する。発表者はこの遺跡を対象とし、2001年に踏査を、2002年に発掘調査を行った。とくに、2002年の発掘調査では、地方発展期および地方王国期に関する考古資料に加え、形成期の土器資料を得ることができた。しかしこの調査の目的は、紀元後700年頃から1000年頃にかけて、アヤクーチョ谷を中心に栄えていたと考えられているワリ国家に関する資料を入手することにあつた。そのため、形成期の資料に関してはあまり分析を進めてこなかった。

しかしながら、上述したようにアヤクーチョ谷の形成期に関わる資料が少ない現状では、タンタ・オルホ遺跡出土の形成期の土器は貴重な資料であるといえる。そこで本発表では、タンタ・オルホ遺跡から出土した形成期の土器の特徴について報告する。まず、タンタ・オルホ遺跡の概要を説明し、続いて、形成期土器の出土状況について述べる。次に、タンタ・オルホ遺跡の形成期土器の装飾や器形について説明する。最後に、タンタ・オルホ遺跡の形成期土

器と他の遺跡から出土している形成期土器との比較を行う。

9 : 40 - 10 : 00

「形成期、パコパンパ遺跡における冶金—銅製錬および金製錬と銅製品・金製品の製作—」

荒田 恵 (国立民族学博物館外来研究員)
清水 正明 (富山大学)
中島 真美 (富山大学)
清水 マリナ (富山大学)

パコパンパ遺跡は、ペルー北部高地に位置する形成期の祭祀遺跡である。2005年より、日本調査団と遺跡を所有する国立サン・マルコス大学が合同で調査を行っており、2007年より出土遺物の分析を並行して行っている。2010年度および2011年度の分析で、パコパンパ遺跡より銅製錬を示唆する銅の鉱滓、銅製錬産物である酸化銅および粗銅が出土していることが確認された。これらの成果に加え、今年度の分析で、台石(アンビル・ストーン)に分類している石器に酸化銅が、また土製小容器に金粒が付着していることが明らかになり、パコパンパ遺跡において銅および金の製錬が行われていた見通しが得られた。

銅製錬および金製錬の開始時期に関しては、酸化銅が付着している台石がパコパンパ I 期 (B. C. 1200-B. C. 800) の後半に相当する層から、土製小容器がパコパンパ II 期 (B. C. 800-B. C. 500) に相当する層から出土していることが確認されているため、銅製錬はパコパンパ I 期後半以降、金製錬はパコパンパ II 期以降に開始されたと考えられる。特に銅製品の製作に関しては、C 区から出土する資料の分析で、パコパンパ II 期初めに骨製針から銅製針へ移行し II 期後半で出土量が逆転することが確認されていることから、II 期後半には銅製針あるいは銅製品を大量に生産することができるようになっていたと推定できる。

銅の精錬方法に関しては、富山大学理学部の清水正明、中島真美、および清水マリナによって実験的研究が行われている。具体的な製錬方法はまだ明らかになっていないが、彼らの研究によって、パコパンパ遺跡では 1083°C 以上の温度で銅製錬が行われていたことが明らかになっている。この温度ならば

金や銀の精錬も可能であり、これらの技術革新が一連のものであったと想定される。

冶金を行った製作址に関しては残念ながらまだ確認されておらず、今後の発掘調査の進展に期待するしかない。

10 : 00 - 10 : 20

「ペルー北部高地パコパンパ遺跡における偶蹄類利用」

鵜澤和宏 (東亜大学)
関雄二 (国立民族学博物館)
マウロ・オールドーニェス (ペルー国立サン・マルコス大学)
ディアナ・アレマン (ペルー国立サン・マルコス大学)
フアン・パブロ・ビジャヌエバ (ペルー国立サン・マルコス大学)

古代アンデスでは、紀元前 4000 年以降、シカやグアナコを対象とする狩猟が衰退し、2 種のラクダ科家畜の飼育に置きかわっていく。なぜ人々は狩猟をやめ、家畜飼育を始めたのだろうか？一般に、狩猟採集から農耕・牧畜へと転換する「生産革命」の発生要因は、西南アジアにおける考古学調査にもとづき検討されてきた。現在も問題が解明されたわけではないが、「技術革新」「気候変動」「人口圧による衰退拡大」の 3 要素を重視する説が広く受け入れられている。

ただし、南米大陸における農耕と牧畜はアフロ・ユーラシア大陸とは独立に生じており、西南アジアにおける生産革命の発生要因モデルが適用できるかは検討を要する。

発表者らは、ペルー北部高地に所在する形成期神殿の発掘調査によって得られた動物骨資料の分析から、形成期中期から後期にかけて、ラクダ科家畜飼育が開始されたことを明らかにしてきた。2007 年に着手し、5 シーズン目をむかえたパコパンパ遺跡(カハマルカ県)における動物考古学調査では、動物骨を出土する層序の所属年代が明確になってきたことにより、研究の進展をみている。特に、今シーズンはこれまで資料の乏しかったパコパンパ I 期(形成期中期)の資料が充実し、ラクダ科家畜を受容する過程をより詳細に検討できるようになった。動物利用の変遷を実証的に検討できるようになった。

本発表では、これまでにあきらかになったパコパンパ遺跡における動物利用のうち、とくに大型は乳類の利用に焦点をしぼり、シカ狩猟が衰退し、ラクダ科家畜の飼育が導入される過程について報告する。

10 : 20 - 10 : 40

「ペルー北高地パコパンパ遺跡における金製品を副葬した墓の発見」

関 雄二 (国立民族学博物館)

フアン・パブロ・ビジャヌエバ(ペルー国立サン・マルコス大学)

本発表では、ペルー北高地パコパンパ遺跡において、国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団が本年9月に発見した金製品を副葬した墓について概要を報告するとともに、被葬者の社会的地位について考察する。既述の墓が発見されたのは、パコパンパ遺跡第3基壇に位置する北基壇内であり、編年上、第II期(B.C.800~B.C.500補正後)の初期にあたる。北基壇は、一辺が30mの半地下式広場の北に位置し、広場の西に位置する中央基壇、南に位置する南基壇とともに、いわゆるU字形の配置を示す建築群の一翼を担う。墓は80cm×90cmの楕円の形状を呈し、深さ約25cmの浅い土壌墓であるが、後の建築活動によって上部が破壊された可能性が高い。被葬者の性別は、自然人類学的分析を待たねばならぬが、攪乱や二次埋葬を想起させる痕跡は認められず、また辰砂(朱)も認められない。黒色鏡形(あぶみがた)土器1点および圈点文(けんてんもん)が施された黒色の鉢形土器1点が副葬されていたほか、珪孔雀石製の小型管玉1点と金環(金製の輪)が1点出土した。金環の直径は2cmであり、下顎直下から発見されたため、首飾りの一部であった可能性が高い。アンデス文明初期の社会は、一般に比較的平等的な社会と考えられてきたが、近年の研究では形成期後期には、宗教的指導者が権力を掌握し始めたことが提示されている。パコパンパ遺跡で2009年において発見された「パコパンパの貴婦人」墓もその証拠の一つである。しかしながら、「パコパンパの貴婦人」墓は、II期における神殿建設の途上において設けられた埋葬であり、神聖な空間に宗教的な力を埋め込む儀礼的行為と解釈された。すなわち神殿建設後の活動におけるリーダーとその権力の存在については未解明の状況にあった。今回の墓の発見は、神殿建設後、この空間を利用した人々や社会の間で、社会的地位の差異が存在したことを示唆するものである。

10 : 50 - 11 : 10

「アステカ王国史における自然災害の神話的解釈」

井関 睦美 (明治大学)

アステカ王国(1428~1521年)は、テツココ湖上の小島を埋め立てて建造された都市国家テノチティトランを拠点として、広くメソアメリカに影響を及ぼした。テツココ湖が位置する標高2,000mを超えるメキシコ盆地は、気候変動の影響を受けやすい環境にある。文献史料や考古史料からは、アステカ王国が度重なる自然災害の経験から、都市環境を整備し、戦略的に支配領域を拡大していった過程が観察できる。

アステカ王国は、大災害に直面した際、技術革新や政治・経済的復興対策だけではなく、精神面でも適応力を発揮することで、さらなる社会発展を実現した。1440年代後半から数年間続いた気候変動とそれに伴う大飢饉では、テノチティトランの第5代王モテクソマ1世(1440-1469年)は、洪水対策として湖を縦断する堤防の建造を命じ、安定的な真水の確保のために水道橋の改造も行った。その後王国は、湖周辺の耕作地の拡大、メキシコ湾岸地域など旱魃の影響の少ない豊かな地域への侵攻、および遠距離交換網の拡充に注力し、その支配領域を拡大した。一方で同王は、災害直後に開催した52年周期の大規模儀礼「年を束ねる儀礼」を再編することで、災害経験を神話的文脈のなかに昇華させ、循環的時間観念に基づく民族史の一部として取り込んだ。伝統的な暦のリセット儀礼であった「年を束ねる儀礼」に、アステカの戦闘的な太陽信仰を重複させることで、戦争や太陽神への生贄を正当化し、政治・宗教的主導力を示す機会としても利用した。

その52年後、第9代王モテクソマ2世(1502-1520年)の治世も、大飢饉に見舞われると同時に「年を束ねる儀礼」を催行する時期に当たっていた。本発表では、すでに周期的事象のセットとして認識されていた大災害と大規模儀礼の思想背景を表現している、モテクソマ2世時代の3点の石像彫刻の分析から、災害の神話的解釈の機能と意味を考察する。

11:10-11:30

「エル・サルバドル共和国チャルチュアパ遺跡における地下レーダー調査」

伊藤伸幸 (名古屋大学)

柴田潮音 (エル・サルバドル文化庁考古課)

今回の調査は、2012年3月に、同遺跡カサ・ブランカ地区とエル・トラピチェ地区で三菱財団助成金を得て、(株)田中地質コンサルタントの協力により実施した。また、目的は地下レーダーを使って、石彫の存在の有無やその配置を解明することである。器材は、NOGGIN250plus Smart Cartを使用した。

先古典期中期における石彫文化はオルメカ文化に代表されるように、石彫が整然と計画され配置されていた。また、先古典期後期は、メキシコのチアパス州からグアテマラそしてエル・サルバドルまでの太平洋岸から高知に至る地域では、イサパ-カミナルフユ様式の石彫文化が栄えていた。この石彫文化を代表するイサパやタカリク・アバフ遺跡では建造物に関連して石彫が整然と並んでいた。こうした石彫文化のメソアメリカ南東端での様相をチャルチュアパ遺跡で明らかにすることとした。

チャルチュアパ遺跡では、先古典期中期から後古典期までの石彫が出土している。今回は先古典期中期～後期の石彫文化を明らかにするために、カサ・ブランカ地区で先古典期後期の石彫文化を、エル・トラピチェ地区で先古典期中期の石彫文化を調査することとした。カサ・ブランカ地区の今までの調査では、素面の石碑や丸彫りの石彫が建造物の近くから出土しており、エル・トラピチェ地区では、地区最大の建造物の中心軸上に並んで出土していた。建造物と石彫の関係が密接であることが明らかである。建造物周辺の低い部分において、地下レーダー探査をすることにより、石彫の存在の可能性を探ることとした。

今回は、この地下レーダー探査の調査結果を発表する。また、過去の考古学調査成果と比較し、その意味を検討する。

11:30-11:50

「マヤ北部低地における石彫マスクの調査速報」

多々良 穰（東北学院榴ヶ岡高等学校）

発表者は、2012年8月にメキシコのユカタン半島北部の遺跡をまわり、建造物に装飾されたモザイク石彫、特に石彫マスクについて調査・写真撮影を行った。石彫マスクが確認できた遺跡は12か所（アカンケー、マヤパン、チチェン・イツァ、ウシュマル、カパー、ラブナー、サイル、シュラパック、エズナ、

オチョブ、ジビルノカック、タバスケーニョ）であった。それらのマスクが何を表象したものであるか、現時点での分析を報告する。

古典期後期から終末期（8～10世紀）に造られたマヤ北部低地の建造物に見られる「長いカギ鼻を持つ石彫マスク」は、1990年頃まで雨の神「チャーク」と考えられていた。しかし近年、マヤ文字の解読により山の怪物「ウィッツ」だと解釈されている。

コパン遺跡の建造物22に見られる「長いカギ鼻を持つ石彫マスク」は、スチュアートによる文字解読の研究成果から、山の怪物「ウィッツ」であると提唱された。その影響で、ウシュマルやチチェン・イツァ、カパーをはじめとする遺跡の石彫マスクも、「ウィッツ」に同定される傾向が強い。

しかし、少なくともユカタン半島の遺跡における「ウィッツ」説の根拠は、図像学に基づくものであり、マヤ文字解読によるものではない。しかも、ユカタン半島で遺跡に精通している人々も、いまだに「長いカギ鼻を持つ石彫マスク」が「チャーク」であると認識している。また、オチョブ、ジビルノカック、タバスケーニョなどのチェネス様式の遺跡では、「チャーク」を表象した可能性が高い石彫マスクを確認できた。その理由の一つは、石灰岩質の土地に豊富に存在するセノーテやチュルトウンの存在である。マヤ人の世界観が、当時の生活環境に大きく影響されていたことも考慮すると、雨水の存在は非常に重要である。発表者が撮影した具体的な写真を通し、「チャーク」と考えられる石彫マスクの存在を報告するとともに、同じ建造物で「チャーク」と「ウィッツ」が同時に装飾されていた可能性も指摘したい。

11:50-12:10

「マヤ文明世界遺産の遺跡マネジメントー金沢大学のティカル計画紹介ー」

中村誠一（金沢大学）

我々が過去の社会や文化を明らかにする目的で学術的な調査研究対象とするマヤ文明の遺跡は、その遺跡が存在する国の国民、その遺跡の周辺に住む人々、その遺跡の管理運営に実際に携わっている人々によって、それぞれ我々とはまったく異なった関心や視点からとらえられている。異なった関心や視点から相互に利害関係が生じ始めると、時には、

観光客の押し寄せる世界遺産の遺跡公園がもつ経済的な価値をめぐって、その世界遺産を管理運営する政府機関と地元の人々との間に抜き差しならぬ対立関係が生じてしまいマスコミを巻き込んでの政争が繰り広げられることもある。またマヤ文明の世界遺産と一口にいても、その様態は多様であり、世界遺産と地元住民の関わり方、世界遺産の調査研究法や維持管理運営の仕方には大きな差がある。

金沢大学は全学の重点研究分野の一つとして世界遺産の遺跡マネジメント分野を選定し、研究拠点形成事業を展開しており、その中心的な事業対象としてグアテマラのティカル遺跡などマヤ文明の世界遺産を選定した。ティカルは最盛期である古典期マヤ文明を最も象徴する都市遺跡の一つであり、マヤ文明の代名詞であると同時に地域唯一の世界複合遺産でもある。1956年～1969年にペンシルバニア大学によって行われた「ティカルプロジェクト」は学術的にマヤ文明研究の標準を作り、修復された大規模な神殿ピラミッドは、ティカルを文化観光地として世界に知らしめることに成功したが、同時に遺跡マネジメント分野での難しい課題も後世の我々に残すことになった。この発表では、世界遺産の保護と後世への継承という視点と世界遺産の活用を通じた経済開発という視点の接点として機能する「文化資源」という考え方に沿って、国際文化資源学研究中心がマヤ地域で展開していこうとする学術的な研究調査の現状と展望に関して本学会員に紹介するものである。

研究発表<後半> (13 : 30 - 16 : 45)

13 : 30 - 14 : 00

「形成期における地域間交流と社会変化：ペルー北部ワンカバンバ川流域を事例として
山本睦（埼玉大学非常勤講師）

本発表は、ペルー北部ワンカバンバ川流域を事例に、形成期（紀元前 3000—50 年）における地域間交流と同流域の社会変化との相互関係について論じるものである。

発表者らは 2005 年よりワンカバンバ川流域において遺跡分布調査、および同流域で最大規模の神殿遺跡インガタンボで発掘調査を実施してきた。そしてこれまでに、ワンカバンバ期（紀元前 2500—1200

年）、ポマワカ期（紀元前 1200—800 年）、インガタンボ期（紀元前 800—550 年）と冠せられた 3 時期の存在を確認した。

これまでの調査の結果、インガタンボ神殿において執り行われる建設活動や儀礼といった諸活動は、成員の紐帯を図り、社会を維持するためのものから、集団内の社会的差異を認識させて不平等を覆い隠し、その関係を正統化する契機や手段へと、次第に（ポマワカ期以降）変化していった可能性が示された。

こうした変化に際して重要な作用をおよぼしたのが、地域間交流である。なぜならば、インガタンボでは、ポマワカ期に入って地域間交流を示すデータが顕著に現れるようになり、それとともに神殿における諸活動（建設活動や製作）が活発化するためである。これは、神殿における諸活動を実施し、集団内の社会的差異を維持、顕在化するうえで、外在の知識や物資、あるいはその製作技術へのアクセス手段として、地域間交流が重要であったためであると考えられる。また、遺跡分布データに目を向けると、ポマワカ期に入ると突如として流域内に周辺地域の諸特徴を有した複数の神殿が建設されるだけでなく、神殿と居住域、あるいは耕作地といった空間分化が生じる可能性さえも示唆された。このようにして、ワンカバンバ川流域では、周辺地域（ペルー北部とエクアドル南部）における地域間交流網に組み込まれるとともに、急激な社会変化が生じることから、地域間交流と社会変化の相関関係が指摘できるのである。

この地域間交流のあり方を大きく変えたのが、ラクダ科動物の利用とそれによる地域間ルートの変化である。これは、神殿の立地にも如実に反映されており、ポマワカ期に建設された神殿は、流域から周辺地域に抜けるルート上に位置している。とりわけ、東西南北の各方向に抜けるルートの結節点に位置するインガタンボは、地域間交流における要衝となり、成員がその状況を積極的に利用することで、徐々に流域内の社会統合の核としての立場を確立していった。これは、地域間交流を通じた物資や情報の獲得・利用が、流域社会へ与えた重要性を強調するものである。

ただし、こうしたインガタンボや流域社会の特性、あるいは地域間交流とその社会的、政治的、経済的役割は、周辺地域社会との関係性のなかで、状況に応じて時期ごとに変化した。インガタンボは、常に

ペルー北部における地域間交流における重要地であったものの、ポマワカ期、そしてインガタンボ期と地域間交流が質的に変化するに従い、周辺地域社会の動向に応じて、その社会的位置づけを主体的に変化させたのである。

14 : 00 - 14 : 30

「アンデス縦断の視点からの形成期セトルメント試論」
鶴見英成（東京大学総合研究博物館）

研究の目的と方法

アンデス文明形成期の社会過程の特徴として、定住村落の中核として機能した神殿建築の更新活動と、社会・経済・技術の発展とがポジティブ・フィードバックの関係にあった、という点が指摘されている。しかし、神殿がその地点に成立した背景については議論の余地がある。神殿の成立の背景は、その後神殿が維持され、またある時点で放棄された理由とも密接であり、形成期の社会過程を正しく理解するために重要な研究課題であろう。個々の神殿遺跡に関し、水利・資源・儀礼的景観・地域間ルートなどの視点からその立地を論じた研究事例はあるが、本研究はとくに地域間ルートに焦点を当てる。アンデス山脈西斜面のセトルメント研究においては、東西方向に延びる海岸河谷を単位として分析するのが通例であった。しかし発表者は山間部を越える河谷間ルートに着眼し、南北方向に縦断する視点から新たな説明を試みる。主対象は神殿遺跡の稠密なペルー北部海岸・山地である。

形成期のルート研究は GIS（地理情報システム）を援用した議論が始まりつつあるが、本研究は踏査によるフィールドデータと先行研究をもとに、帰納的に遺跡間のつながりを浮かび上がらせる方法を採用する。また従来神殿・定住村落研究において等閑視されてきた岩絵を、ルートの経由地を示すデータとして重視する。このように作業仮説としてルートを復元しつつ、そこから形成期セトルメントの動態を考察する。

本研究は集積されたデータ全体の蓋然性に依存しており、終わりなきデータ収集と理論的裏付けを要する。試論の段階ではあるが、現時点での見通しを提示して批判を仰ぎたい。

南北方向の主要ルートの経路とその背景

神殿の成立以前、パイハン文化に始まる狩猟採集伝統においては、海岸から山地に至るまで縦横無尽に資源が利用された。その時点での山間部通行に明確なルートがあったとは想定できない。しかし神殿・定住村落の成立と前後して、複数の河谷を結ぶような長距離ルートの経路が限定されたことが、データの集積による帰納的な復元から見て取れる。現時点での見通しでは、もっとも古くから重点的に利用されたのがサンティアゴ・デ・チューコ高地を経由するルートであり、形成期早期の神殿、美術、および最初期の土器がその線上に分布する（各河谷の沿岸部に大規模な神殿建築が存在したのは、海上交通を想定すべきかもしれない）。ついで形成期前期から中期にかけて、サンティアゴ・デ・チューコ高地に到達しないモチェ・ビルー・チャオの各河谷の中流域に神殿遺跡が登場するが、それらの立地は中流域を縦断するルートと密接である。一般に地域間ルートは神殿に先行するか、もしくは少なくとも同時に成立したと考えられる。たとえば形成期後期のパト峡谷北岸では、既存のルート上に神殿が多数連なる状況が生まれるが、その区間の交通の重要性・頻度の高まりと関係すると考えられる。

山間部通行の経路は本来自由に選べるはずであるが、形成期における人と物資の長距離移動は、中央高地北部に始まるラクダ科動物飼育・荷駄利用と密接であったため、飼育環境（海岸部ロマスの分布など）、安全性（峡谷の回避など）といった側面から経路が規定されたのではないか。さらに牧畜の拠点サンティアゴ・デ・チューコ高地、カハマルカ高地へと通時的に北進するにつれ、荷駄獣の供給元は変遷し、ルートの区間ごとの利用頻度が変化し、それが神殿の成立や衰退に影響を及ぼした、という仮説の検証が長期的課題である。

14 : 30 - 15 : 00

「ペルー、カンパナユック・ルミ遺跡における神殿の再利用に関する考察」

松本雄一（国立民族学博物館）

ユリ・カベロ＝パロミーノ

（ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学）

エディソン・メンドーサ

（ペルー国立サン・クリストバル・デ・ワマンガ大学）

発表者は、2007年から2008年にかけてペルー中央高地南部、アヤクチョ県ビルカスワマン郡に位置するカンパナユック・ルミ遺跡において発掘調査を行った。同遺跡は形成期中期・後期（紀元前1100-500年）に対応する神殿遺跡であったが、長い空白期間を経て後期中間期（紀元1000-1400年）に再びチャンカ文化によって建築が再利用されるようになった。発表者の調査によって、特殊な再利用のコンテキストが二つ確認されている。

一つは、形成期神殿の主要なアクセスである中央基壇の階段を掘り起し、壁面に円形の構造物を付け加えた部分である。これらのいくつかは灰で覆われており、その内側からは動物をかたどった土製のミニチュアなどが発見された。おそらくは奉納遺構であろうと考えられる。もう一つは埋葬であり、形成期神殿の基壇の上から大量の人骨が発見された。不規則な骨の配置、欠損した部位などから考えて、どこか別の場所で埋葬されていたものが持ち込まれた二次埋葬であろうと考えられる。また埋葬の上には灰層が位置しており、半完形土器と動物のミニチュアが多く出土した。このようなデータは、二次埋葬に際して、儀礼的な饗宴が行われた可能性を示している。

また、形成期において神殿として用いられていた部分には、近隣の遺跡で数多く見られるようなチャンカ文化の円形住居址は全く確認されていない。さらにカンパナユック・ルミ遺跡は、ビルカスワマン周囲の山上に見られるような、ある種防衛的な集落とは建築においても立地においても共通点を見出すことができない。このような状況から考えて、形成期の神殿であるカンパナユック・ルミは後期中間期において儀礼を行うための空間として再利用されたと考えられる。エスノヒストリーのデータによれば、インカがビルカスワマンにおいてチャンカ族に勝利した際、悪く醜いワカを打ち倒したという記述が存在しており、カンパナユック・ルミがチャンカ文化のワカの一つであった可能性が示唆される。

15 : 15 - 15 : 45

「シユモッコ政体の社会政治構造：土器胎土分析にもとづく先スペイン期ティティカカ湖盆地南岸史の考察」

佐藤吉文（国立民族学博物館・外来研究員）

本発表では、発表者が実施した土器の胎土分析にもとづいて、先スペイン期ティティカカ湖南西岸のパレルモ遺跡を中心とした地域におけるティワナク期（A.D. 500-1150）前後の社会政治構造を実証的に論じる。

ここ20年ほどの考古学調査によって、紀元600年ごろまでに国家段階の政治機構を整えたとされるティワナクがティティカカ湖盆地各地にもたらしたさまざまな影響は、それぞれの地域の社会政治的状况によって異なるかたちで現われたことが知られている。しかしながら、セトルメント・システムの分析を除けば、それを方向づけた形成期の社会政治構造とティワナク期以後の変化を地域レベルで実証的かつ具体的に論じた研究は少ない。それは詳細な遺跡間比較を可能にする発掘調査がまれなためである。

発表者が発掘調査を実施してきたパレルモ遺跡は、先土器期末期（3500-2000B.C.）からインカ期（A.D. 1450-1532）まで断続的に利用された複合遺跡である。従来の研究では、形成期後期（400B.C.-A.D. 500年）からティワナク期には半地下式広場を整え、その祭祀的性格を強めて周辺地域を社会的に統合する役割を果たしたと考えられてきた。その政治的なまとまりが「シユモッコ政体」である。当該地域において実施された遺跡分布調査ではその地理的範囲は必ずしも明確ではないが、セトルメント・システムの分析では、この地域に概ね三つの遺跡規模階層が認め得ることから、首長制段階の社会のなかでも比較的複雑な社会政治構造を有していたと想定されてきた。しかしながら、その一部をなし、「社会的エリート」とも関連づけられるトゥマトゥマニ遺跡やシユモッコ・ハキナ遺跡とパレルモ遺跡が具体的にどのような関係にあったのかは明らかではない。

しかし、発表者が今夏実施したパレルモ遺跡出土土器資料6,402点の胎土分析は、シユモッコ政体をそれらの遺跡を形成したひとびとの具体的な行為にもとづいて論じるうえで契機となる。発表者は、少なくとも形成期後期からティワナク期にかけてのパレルモ遺跡出土土器が20種類以上の胎土から作られていることを確認した。本発表では、胎土を基準として出土土器の構成を定量的に示してその特徴を論じるとともに、香炉など祭祀性の高い土器に注目して胎土と器形の相関関係について定性的な予察を加える。さらに、直線距離で3km北東に位置する

トゥマトゥマニ遺跡における胎土別土器構成と比較して遺跡間での差異について検討する。そのうえで、形成期後期 I 期のティティカカ湖南岸のタラコ半島で認められた近隣三遺跡間の胎土構成比較を参照して、その遺跡間関係の普遍性を検討する。最後に、このような手続きを踏まえて得られる遺跡間関係を既存のセトルメント・システム研究の成果ならびに発表者によるパレルモ遺跡の発掘調査結果に総合して、「シユモッコ政体」の社会政治的構造とその特徴について論じる。

15 : 45 - 16 : 15

「ワリ帝国における地方支配—ペルー北部高地、エル・パラシオ遺跡の発掘調査」
渡部森哉（南山大学）

しばしばインカ帝国の祖型と見なされるワリ帝国（後 600-1000 年）について、近年新たなデータが蓄積されつつある。クスコ県エスピリトゥ・パンパ遺跡で 2010 年に発見されたワリ文化の墓などがその一例である。本発表ではペルー北部高地カハマルカ県に位置するワリ帝国の行政センター、エル・パラシオ遺跡における 3 回にわたる発掘調査のデータを基に、同帝国の地方支配、政治組織、政治と文化の関係について考察する。

しばしば、帝国という言葉から、文化的統一性が想定される場合がある。しかし、帝国という政治組織の特徴の 1 つは、民族的文化的多様性である。例えばインカ帝国においては、支配者集団であるインカは、他の民族集団と自らを識別し、頭飾りや耳飾りによって、その際を明示した。しかも民族集団の枠組み自体も、インカの支配下によって操作され、分断統合されたと考えられる。

政治的統一性と文化的多様性を帝国の特徴とするならば、ワリも帝国という名称で呼ぶことが適当である。インカ帝国では、いわゆるインカ様式の遺物・遺構の分布は、地域によってばらつきがある。カハマルカ地方においては、タンブと呼ばれる行政センターがあり、インカ道が現在でも遺構として確認できる。ところがそれ以外には、インカの存在を示す証拠を見つけることは難しい。そもそもタンブとは、恒常的に人間集団が生活する場ではなく、各地の人間集団をコントロールするための装置であった。それは人々を集めて労働をコントロールし、生産され

た物資を管理し、そして人々を集めて儀礼を行う場であった。こうした行政センターが存在すれば、その周囲の地域の人々が、インカ帝国の支配下にあったと想定することができる。

このようなインカ帝国とのアナロジーを用い、ワリの場合にも行政センターがあれば、その地域が支配下にあったと想定したい。カハマルカ地方においては、以前ワリの明確な証拠が確認されていなかったが、2008 年に開始したエル・パラシオ遺跡の発掘調査により、同遺跡が 50~100 ヘクタールある大遺跡であり、建築、埋葬形態の特徴、遺物の出土パターンなどから、ワリ帝国の行政センターであることが明らかとなった。幅 140cm まである厚い壁が直交し、アクセスがコントロールされた建築様式は、明らかにワリ文化の特徴を示している。壁を建設する際に壁の基礎に墓を設置する特徴、土器を意図的に割って奉納する特徴、半地下式の石室なども、在地のカハマルカ文化ではなく、ワリ文化の特徴と合致する。一方で、出土土器の大部分は在地のカハマルカ文化のものであり、ワリ様式の土器片は少ないがあらゆる層、地区から出土し、また墓の副葬品としても完形品が確認されている。ワリ文化の遺跡内部は、アクセスがコントロールされ、それに平行するように、ワリの彩色土器を用いた儀礼は、かなり限定された人々のために行われた、排他的な性格を有していたと思われる。従って、ワリ様式の遺物の希少性から、在地の人々の主体性を強調することは論点がずれている。行政センターがある地域はワリ帝国の直接支配下にあったと考えるべきである。

16 : 15 - 16 : 45

「土壙墓からみえてくる先古典期マヤ南部地域の社会」
市川 彰
（名古屋大学大学院・日本学術振興会特別研究員）

「土壙墓」は、最も簡素な墓壙構造をもつ墓である。石室墓などと比較して、その簡素な構造や副葬品の少なさゆえに、一般的には被支配層あるいは下位層の人々の墓として解釈されることが多い。古代マヤ社会は 9 割以上が被支配者層で構成され、その中身は決して均質なものではなかったと考えられている。しかし、マヤ地域における墓制研究の動向を概観してみると、石室墓など、いわゆる厚葬墓を対象にすることによって支配層の存在を浮かび上がら

せる研究は比較的多いものの、土壙墓にみられる諸属性の類似・差異に着目し、古代マヤ社会の一側面にせまろうとする研究はほとんどみられない。被支配者層＝土壙墓の被葬者と仮定するならば、現在の研究状況において最も検出例の多い土壙墓の基礎的かつ実証的分析は古代マヤ社会の理解を深化させる上で重要な分析視点となりうる。

本発表では、発表者が主なフィールドとするマヤ南部地域の土壙墓を取り上げ、土壙墓の分析から古代マヤ社会の何にせまることができるのかについて基礎的検討をおこなう。

はじめに、先古典期マヤ南部地域出土の墓のうち約85%を占める土壙墓を取り上げ、その他の墓壙構造と比較することにより巨視的に土壙墓の諸特徴を捉え、それらが示すマヤ南部地域社会の実態について基礎的検討をおこなう。

次に、エルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡ラ・クチージャ地区で検出された先古典期後期の土壙墓群を例として、墓壙構造・規模、副葬品の種類、特殊行為(頭蓋変工など)の分析を通じて類型化し、各類型間の差異の析出およびその意味について考察する。

分析から得られた所見は以下の通りである。

1) 全体的な傾向として、マヤ南部地域の土壙墓は、その他の墓壙構造と比較すると先古典期を通じて最も副葬品の種類数が少なく、またヒスイ製品をはじめとする威信財の副葬率も低い。したがって、土壙墓の被葬者は社会の大部分を占める下位層の人々であったと考えられる。

2) しかし、その中にも石室墓などの厚葬墓同様に副葬品の種類数が多い例、複数の威信財を有している例、歯牙変工や頭蓋変工などの特殊行為が施されている例が看取できることから、下位層内における特殊な人物の存在、階層差や身分差の存在も推察される。

3) エルサルバドル共和国チャルチュアパ遺跡ラ・クチージャ地区の土壙墓群は、神殿ピラミッドや住居にともなわず「墓域」を形成している(図1)。

4) その墓域に埋葬された人々の墓は、墓壙構造・規模、副葬品の種類、特殊行為から少なくとも3つの異なる集団の存在を想定することができ、各集団にリーダー的人物が存在することも想定される。しかし、それらが家族集団を示すのかまたは職掌や階層に基づく集団を示すかなど、類型化された集団の詳細については今後の調査の進展をまつ必要がある。

事務局からのお知らせ

1. 研究懇談会の開催について

2013年も学会主催の「研究懇談会」(東日本部会、西日本部会)を開催いたします。会員の研究発表と交流の場をあらたに設け、学会としての研究活動をさらに広く展開していくことが目的です。企画、日程等について決定しましたら、メールや学会ウェブサイトでご連絡いたしますので、どうかふるってご参加下さい。

2. 第18回研究大会・総会の開催について

昨年の総会でもお知らせしましたように、古代アメリカ学会第18回研究大会・総会を2013年12月7日(土)に山形大学(山形県山形市)において開催いたします。ご多忙のこととは存じますが、万障お繰り合わせの上ご参加いただきますようお願いいたします。

3. 会費納入のお願い

2012年度までの会費が未納となっている方は、会誌送付時に同封いたしました振込用紙でお振込み下さい。古代アメリカ学会は会員の皆様の年会費で運営されております。ご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、2010年度以前にさかのぼり、会費が未納となっている会員につきましては、会誌・会報の発送を見合わせております。なお、当学会の振込み口座は以下の通りです。

○ゆうちょ銀行

口座番号：00180-1-358812

加入者名：古代アメリカ学会

○三菱東京UFJ銀行本厚木支店

口座番号：1761650(普)

口座名義：古代アメリカ学会

4. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを1冊2000円(会員価格。非会員の場合は3000円)で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊

数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第3号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

原稿募集

『古代アメリカ』の原稿募集

本学会の会誌『古代アメリカ』第16号(2013年12月刊行予定)に掲載する原稿を募集しています。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定・執筆細目(第15号掲載の最新のものをよくお読みの上、投稿をお願いします。

「論文」のほか「調査研究速報」にも奮ってご投稿ください。「調査研究速報」では、発掘などフィールドワークの成果はもちろんのこと、文献調査やラボトリーでの分析結果報告など会員諸氏からの投稿をお待ちしております。「論文」は査読を終えたものから随時掲載が決まります。「調査研究速報」の原稿締切は9月25日で、査読結果により掲載が決まります。

いずれの場合も、投稿希望者は下記編集委員宛てに事前にご連絡願います。投稿カードを配布しますので、これを提出原稿に添付してください。

お問い合わせ先:

井上幸孝(運営委員、会誌編集担当)

〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 専修大学文学部

Tel. Fax

E-mail

会報「34号」の原稿募集

会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

◎内容

○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

○古代アメリカ関連の学会・研究会等の情報

会員が所属する学会・研究会・勉強会・公開講座などの情報・発表報告。

○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

○その他

会員にとって有益な学術情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて4000字(会報2ページ分)以内とします。

○原稿はwordファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当委員まで事前にご相談ください。

◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をすることがあります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員(会報) 福原弘識宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。

送付先アドレス

(会誌とは異なるのでご注意ください)

○投稿締切 5月20日(月)

○発行予定 6月18日(火)

会員の叙勲

大貫良夫会員が、2012年度の春の叙勲において、長年にわたるアンデス研究と日本・ペルーの国際交流推進のご功績により、瑞宝小綬章を受けられました。大貫会員は、本学会において第1期から第3期、第6期から第7期の会長を務められ、学会の発展に

も多大なご尽力をいただきました。今回の叙勲は、本学会にとってもたいへん喜ばしいことと思います。誠におめでとうございます。

(編集委員)

<編集後記>


本年度より、会報編集担当が変わりました。どうぞよろしくお願い致します。

今回は、2本の寄稿がありました。村野会員の投稿は、日本における多文化理解だけでなく、相互貸し出しという形態にすることで、相手国との相互理解を促すような展示のあり方であり、今後のモデルケースになるのではないかと思います。佐藤会員の投稿は、民話の話だけにとどまらず、民話と考古学、現代の人々の戦略が絡み合った様相を示すものであり、文化人類学の観点からも興味深い内容でした。

会報の投稿記事は、調査の周辺領域にあたる内容や、エッセイ的な内容などでもかまいません。若い研究者の方の積極的な投稿をお待ちしております。

(中川)

発行 古代アメリカ学会
発行日 2013年1月15日
編集 古代アメリカ学会 会報担当：福原 弘識
中川 渚

古代アメリカ学会事務局
〒338-8570
埼玉県さいたま市桜区下大久保 255
埼玉大学教養学部 
E-mail: jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座：00180-1-358812
ホームページ URL <http://jssaa.rwx.jp/>